

*Schooling for Tomorrow*  
**Think Scenarios, Rethink Education**

*Summary in Japanese*

**明日の学校教育**  
**思考のシナリオ、再考教育**  
**日本語要約**

**エグゼクティブ・サマリー**

今日の教育界で起きていることは、今後数十年の人々の生活およびコミュニティ全体の繁栄に大いに影響を与えるものである。しかし教育における意思決定は、長期的な展望についてというよりも、むしろ主として差し迫った課題への対応や、伝統的な慣行を維持する効果的な方法を模索することに関して行われている。いくつかのシナリオを作成・利用することは、この不均衡を是正するひとつの有力な方法といえる。OECDの「明日の学校教育」シリーズの新刊では、その方法に関する理論と実践について示していく。

**1. 教育に効果をもたらすシナリオの作成と利用**

パート 1 では各界からの見識をもとに、未来の思考が教育に対して真に効果を発揮できる、主要な課題と優先事項を特定している。内容は、学問の面からみた根拠に基づく全体像と実践に応用可能な教訓とを組み合わせたものである。

---

**学校の個性化・公平化および  
シナリオアプローチ**

---

ジェイ・オグルヴィはシナリオの作成方法と様々な用途について検討している。教育とビジネスの特徴を比較しながら、オグルヴィは、教育者は戦略的な選択肢に直面すると、行動よりも論じることを好むのに対し、ビジネスマンは迅速な行動を選ぶ傾向にあるとしている。本書の議論ではシナリオの3つの用途について詳述している。すなわち、戦略的な対話を促す、真に新しく先見性あふれる思考を刺激する、そして、行き詰まりを防ぐモチベーターとなる、ということである。オグルヴィは肯定的・否定的双方のシナリオを比較し、考え方や用途は異なるものの、二つのシナリオは共に必要であるとしている。

パート 2 では、内容の詳細について触れるとともに、手法上のポイントについて例証している。オグルヴィは、学校は農工業時代に誕生した際の名残があるとし、学校の意味決定をめぐる課題と「精密農法」に絡む課題との間にどのような共通点を見出せるかを示している。オグルヴィは、知識へのアクセスが必須である情報化時代において、公平性と平等性をより持続する形で実現することは不可欠であるとしている。さらに、学校教育に市場の原理をより体系的に導入することも唱えている。

---

### システム思考と持続的变化 能力開発

---

教育の面からイノベーションと変革を考える第一線の研究者、マイケル・フランによれば、教育現場の意味決定者にとっては、未来を思考するだけでは不十分であるという。現行システムを具体的かつ効果的に変革する方法を概念的に示すことも同様に必要である。フランが行ったのは、既存の知識で対応可能な「技術問題（technical problems）」と現行の知識では解決できない「適応課題（adaptive challenges）」の対比である。フランは、教育における未来の思考が真価を発揮できるのは、適応課題に関してであるとしている。「システム思考」は必要であるが、実際に有効であるためには、実践志向のシステム思考者を育成しなければならない。

持続可能性の向上を目指して主要機関の指導者の能力を高め、今度はその指導者たちが他の指導者を同じ方向に導いていくというのが、前進に向けた鍵である。フランは、持続可能性の次の 8 つの要素を定義し、それぞれについて論じている。すなわち、1) 道義的目的をもった公共サービス、2) あらゆるレベルにおいて文脈を変化させることへの意欲、3) ネットワークを通じた側面からの能力開発、4) 知的アカウンタビリティと新たな縦のつながりの形成、5) 深い学習（deep learning）、6) 短期的・長期的成果双方に対する責任、7) 周期的な活性化、8) リーダーシップという長い梯子、である。

---

### 教育シナリオにつながる価値と供給の傾向

---

ジャン・ミシェル・ソソワは、ビジネス界におけるシナリオの進化と応用、それらの教育における意思決定との関連性と価値に注目しながら、シナリオの基本的特徴を「理念型」として提示し、それらを発展させる手段について述べている。ソソワは、シナリオ作成が特に国際比較を基に行われる場合には、厳しい前提が伴うと示唆している。これは「地図」と「領土」とのマッチングと捉えることもでき、その場合は、シナリオを作成することはマップメーカーとしての役割を担うこととなる。

ソソワは、学校教育の傾向と未来 社会の仕組みの中での学校の地位に関する価値の転換、そして学校教育の提供または供給機能 について分析するための 2 次元の枠組みを示している。学校教育が消費者としての「顧客」に向けられるなかで、価値のラインは社会志向型の教育から個人志向型へと向かっている。供給のラインでは、学校は閉鎖的あるいは開放的と捉えられている。これら 2 つの次元が組み合わせられてできる 4 つの区分を、それぞれ「保全」シナリオ（閉鎖的 + 社会的）、「生存」シナリオ（閉鎖的 + 個人的）、「変容」シナリオ（開放的 + 社会的）、「マーケット」シナリオ（開放的 + 個人的）と称している。

---

## 分野横断的なシナリオの類型とその用途

---

フィリップ・ファン・ノッテンは、シナリオを「過去・現在・未来の動向に関する様々な視点を反映した、選択可能な仮想未来についての整合的で首尾一貫した記述であり、行動の基礎となりうるもの」と定義している。ファン・ノッテンが検討した研究の多くは、環境、エネルギー、輸送、テクノロジー、地域開発といった教育以外の分野で実施されたものであり、こうした分野になじみのない教育関係者にとっても有益なものである。

次にファン・ノッテンは、本章の主要部分でシナリオ手法の類型を提示し、論じている。これは目標・作成・内容の3つの「マクロ的」特徴と、さらにこの広い特徴のなかの10の「ミクロ的」特徴とに分類される。この類型は、シナリオアプローチの多様性とシナリオの使用法とその背景、ならびに成果を明確にするものである。

ファン・ノッテンは、「好奇心の文化」と称して、シナリオ作成を効果的にするさまざまな組織上の構成について論じ、非常に長期に及ぶ思考の価値を唱えている。

---

## 学問としての未来研究とシナリオに対する「可能性空間」アプローチ

---

リエル・ミラーは変化のスピードと複雑さを背景に関心が引き起こされる未来研究分野について紹介し、歴史研究との数々の共通点を導き出している。ミラーは予測精度の向上を求める際の問題点を指摘している。ひとつは、過去の傾向に依存する予測手法を採用すること、もうひとつは、可能性の高いものに執着する結果、可能性は低いながらも、その方が望ましい場合もある未来を目立たなくしてしまう恐れがあるということである。予測アプローチに潜む罠のなかには様々なシナリオによって克服できるものもあり、よって、戦略的思考にとってシナリオは有益なツールとなりうるのである。

傾向あるいはビジョンの明確化のモデル化に基づくシナリオ「傾向別シナリオ」と「選好別シナリオ」は、時に予測アプローチと同様の限界が存在し、独創的な発想を抑制してしまう恐れがある。ミラーはその代替として「可能性空間」アプローチを紹介している。同アプローチでは、シナリオを以下のステップを通じて構築していく。すなわち、シナリオ主題の重要な属性の決定または定義付け、この属性の変化の主要属性を用いた空間の設計、そして確定した可能性空間のなかでの各シナリオの特定である。

---

## 成功するシナリオプロセス 利用者ガイドライン

---

本章では、ヨナス・スヴァヴァ・イベルセンが利用者の視点に立った様々なシナリオ手法を紹介している。4つの重要な局面に関してシナリオ手法を示し、成功するやり方と陥りやすい罠について考え方を示している。

- 主題の「地図作成と概要説明」は最初の重要なステップである。これによって焦点が定まり、適切なシナリオの作成が可能になる。

- 「重要課題および動向の特定」：様々な学問分野での分析や専門家からの見識や新たな見方を得ることにより、分析を行うことが可能である。
- 「シナリオの作成」：イベルセンは本章の中心となるこの部分を、さらに1) ドライバー（けん引役）の特定、2) 各種傾向の整理、3) 各傾向の優先付け、4) シナリオ軸の特定、5) アクター分析の5項目に分けている。
- 「シナリオの使用」では、共有知識の構築、公共での議論の強化、決定を支えるツールという3つの主要用途について検討し、これらが生じる背景と、実現のための最善の方法について意見を述べている。

イベルセンは結論として、オーナーシップ構築の重要性を強調し、シナリオ作成過程はすべての関係者に明快なものでなくてはならないとしている。また、広範な包括的アプローチの採用も唱えている。

## 2. 未来の思考の実践

パート2では、改革課題に取り組むなかで実際にシナリオを利用している、イングランド地域、オランダ、ニュージーランド、カナダ・オンタリオ州の事例を紹介する。最後に、こうした例を踏まえ、第一線の専門家による将来に対する見識を示す。

---

### 指導力向上のためのシナリオの活用 イングランド「フューチャーサイト」 プロジェクト

---

「フューチャーサイト（FutureSight）」プロジェクトは、イングランドの様々な機関の連携による取り組みで、OECDも開発に関わっている。その目的は、教師が未来を単に推測するのではなく形成することができるよう、実践を通じて未来思考力を高めることにある。これまでに様々なバックグラウンドをもつ学校の教師、組織の上級職員、後期中等学校の生徒、上位の政策立案者に対して実施されてきた。本章ではツールの説明とともに、その開発プロセスや用途についても述べる。これは次の4モジュールサイクルが土台になっている。

- 主要な傾向を調べ、その方向性を探る（「石を転がす」）
- 各シナリオを様々な視点で実際に体験する（「現実化する」）
- 理想的な複合シナリオの分析、コンセンサスの形成のためのツールを提供する（「望ましい未来へ」）
- 現在の慣行・政策と理想型とを比較する（「現行との調整」）

各ディスカッションレポートでは、フューチャーサイト・プロジェクト参加者からのフィードバックについて詳述する。

---

### 分権型変革に向けた一つの手段としての 未来の思考 オランダの例

---

オランダ政府による教育改革の理念は、利害関係者への影響を強め、学校の分権化とより高い独立性を実現するというものである。多年に及ぶ政策プランが

あり、教育の各セクターに対する短期（4年）・長期（8～10年）ビジョンを示している。OECDの「明日の学校教育」プログラムでは、2つの取り組みに焦点を置いている。

そのひとつは、オランダ校長養成アカデミー（Dutch Principals Academy）主催の未来の思考に関する催しを通して、ビジョナリー・リーダーシップ（訳注：明確なビジョンをもって組織を導く）能力を高める取り組みである。独創的思考を促し、学校のあり方に関する根本的な問い（なぜ人は学ぶのか、何を学ぶべきなのか、どこで、どのようにして学ぶことができるのか、学習はいかにして形成できるのか、学習は将来どのような形で支えられていくのか）に対応するために、カナダ・オンタリオ州でのシナリオ（第10章）と同様のものが初等学校の校長のグループに対して使用された。もうひとつの取り組みでは、「スラッシュ/21（Slash/21）」という大胆な学校教育改革に注目する。スラッシュ21は、2つの中心概念 知識社会の台頭と個別化の拡大 をもった未来に対する特定のビジョンを基礎に置いている。

---

#### 制度全体にわたる学校教育改革 ニュージーランド「中等教育の未来」 プログラム

---

ニュージーランドの「中等教育の未来（Secondary Futures）」プログラムは、次のことを通して中等教育のビジョンを示そうというものである。すなわち、未来を描くための「空間を創造する」、未来を考えるための「ツールを提供する」、ニュージーランド社会の将来の方向性についての「傾向を共有する」、生徒をより成功に導くための可能性に関する「情報を共有する」、教育システムの将来に関して「人々の選好を引き出す」、そして、情報を普及させ「変革を支える」である。このプログラムでは、教育分野・非教育分野の有識者4人を「監督者」に任命しプロセスの独立性を保護するという、独特のアプローチをとっている。

「中等教育の未来」プログラムで明らかになったテーマと主要な問いは、進行中の話し合い、調査、分析の体系を示すマトリックスに組み込まれている。このマトリックスはインターネット上でファイルキャビネットの役目も果たし、「中等教育の未来」プログラムのイベントを通じて収集された情報や、教育改革の継続を促す様々な資料が収められている。

---

#### 「職業としての教職」を再考するための 対話と能力の創造 オンタリオ州の例

---

「職業としての教職」プログラムは、カナダ・オンタリオ州の英語系地域の学校制度において開発されたものであり、一連のワークショップでシナリオが活用されている。プロジェクトの背景にあったのが、コンセンサスを得るのも困難であったかつての緊張の時代であり、最初に行った作業は、シナリオを用いてある主要政策課題に関する対話の場を設けようとするものだった。

オンタリオのプロジェクトでは、複数のシナリオに基づく戦略計画の枠組みを用いた。この枠組みは、望ましい未来とそれを実現するための戦略を特定している。ここで使用したのはOECDの各シナリオの修正版であり、現在ではそれぞれ「過去の再定義」、「破壊」、「コミュニティ中心型モデル」、「マクロモデル」、「複雑系科学の躍進」と呼ばれている。プロジェクトには、学校と学校

教育に関する代替シナリオが職業としての教職にどのような影響を及ぼすかを明らかにするために、幅広い分野の専門家、教師などが参加している。今後は望ましいシナリオを特定するとともに、政策論議と意思決定を促すための確固たる戦略が作られることが期待される。

---

オンタリオのフランス語教育の将来の  
ための「7番目のシナリオ」  
「ビジョン2020」

---

「ビジョン2020 (Vision 2020)」プロジェクトは、1990年代末、社会への同化と独自文化の衰退に対するオンタリオのフランス語系住民の懸念があるなかで、彼らが学校統治の手段を得たという点で、時宜を得たものであった。オンタリオ州教育省やフランス語教育機関、教育分野のさまざまな関係者の間では、プロジェクトの進展状況を評価し、質の高いフランス語教育を提供する上での課題を特定し、オンタリオのフランス語教育の将来について検討することの必要性を感じていた。

明日の学校のパラメーターを視覚化するためにシナリオアプローチが採用され、未来思考力を開発する手段として有益であることが証明された。本プロジェクトでは、学校教育に関するOECDの6つのシナリオを出発点として、フランス語教育の未来について独自の7番目のシナリオを作成した。ビジョン2020の結論は2006年末までは出ないが、マイノリティな制度としてのフランス語教育の実施ビジョンの発展につながることを期待される。

---

第一線の思考者が未来思考教育の実践と  
将来性について検討

---

今回、2004年6月のトロントフォーラムで報告担当を務めた専門家が要請を受け、教育における未来の思考に関する広範な優先課題を提示し、彼らが追跡調査をしていたあるボランティア制度に関して意見を寄せている。彼らの寄稿からは、未来思考アプローチの可能性への期待が込められている一方で、教育改革の複雑さを実感していることがわかる。

チャールズ・ウンゲルライダーは、特に価値に関する問いに注目している。すなわち、危機にある価値を明らかにするための未来の思考の活用法と各価値間の矛盾も含めた関係性についてである。レイモンド・ダイゲルは、現行の改革は往々にして「一部をいじっている」だけではないかと問いかけ、より根本的に再定義をする上でシナリオは有用であるとしている。ワロ・ハットメイカーは、こうしたアプローチの基礎となる根拠を整理し、即座に規範的な議論に進むよりも、しっかりとした分析ツールを使用する必要があると論じている。ハンネ・シャピロはこうした立場に同調するとともに、未来の思考に携わる関係者や手法の範囲を拡大すべきだとしている。トム・ベントレーは、現在行われている未来の思考の内向き・外向きそれぞれの側面の違いを示し、論じている。ベントレーは、いかにシナリオが様々な思考を誘発しうるかを述べる一方で、確実に妥当性のある未来分析と、既存のコミットメントに対して公平かつ柔軟に対応できる環境を求めている政策決定者にとっては、そのことが特に課題になるとしている。

© OECD 2006

本要約は OECD の公式翻訳ではありません。

本要約の転載は、OECD の著作権と原書名を明記することを条件に許可されます。

多言語版要約は、英語と仏語で発表された OECD 出版物の抄録を 翻訳したものです。  
OECD オンラインブックショップから無料で入手できます。

[www.oecd.org/bookshop/](http://www.oecd.org/bookshop/)

お問い合わせは OECD 広報局 著作権・翻訳部 にお願いいいたします。

[rights@oecd.org](mailto:rights@oecd.org)

Fax: +33 (0)1 45 24 13 91

OECD Rights and Translation unit (PAC)  
2 rue André-Pascal  
75116 Paris  
France

Visit our website [www.oecd.org/rights/](http://www.oecd.org/rights/)

